

## 「子ども一人ひとりの笑顔が輝くひよ子こども園」

ひよ子こども園カネミネ 教育アドバイザー 内田伸子  
(お茶の水女子大学名誉教授)

11月15日(水) 雲ひとつない秋晴れの日に、ひよ子こども園を訪問しました。  
玄関に入ったとたん、保育室から子どもたちの笑い声が響いてきて幸せ気分になりました。

ひよ子こども園は「子ども中心の保育」に切り替えて3年目。教師主導の「Y式一斉保育」から子どもの主体性を大事にする「子ども中心の保育」に切り替えるのに3年かかりました。  
池松英治園長の願いに賛同した小林沙織主任保育士をはじめ先生方のそれこそ想像を絶するご尽力があったればこそこの「保育革命」です。

子どもが遊びや生活の主人公で保育者は賢いわき役にまわる保育を実践する！これを決意した先生方は保育力を磨くための保育研修会に積極的に参加してきました。庄籠道子先生のアドバイスを受け「遊びは学び」を理解し納得し保育環境や援助の仕方について研鑽を積んでこられました。保育実践を通して子ども一人ひとりを丁寧に見・観・看・診る「目」を磨いてきました。子どもの遊びの記録「ドキュメンテーション」を作成し、それをめぐって対話して保育の質を向上させてきました。

子どもたちはすぐに子どもが主人公の生活に馴染みました。笛や号令、禁止や命令で動かされるよりも、はるかに自由に自分の思いを表現できるひよ子こども園が居心地がよいことに気づきました。

保育室も園庭も変わりました。園庭の滑り台や砂場、栽培コーナー、飼育小屋、ビオトープ、ボルダリング、探検できる裏山すら、子ども一人ひとりの成長の場となっています。  
家庭からもらってきた廃材が「遊誘財」(©鳴門教育大学附属幼稚園)に生まれ変わり、廊下の端の「遊誘財ボックス」で出番を待っています。子どもは工作・造形活動中に必要な遊誘財を取り出して作品づくりに活用しています。保育室では文具や折り紙などが乗せられたワゴンも大忙し。出番が多い遊誘財たちです。これも勉強会でワゴンを活用したらよいとの庄籠先生のご提案に園長先生がすぐに応じてくださったものです。

私が訪問した日は秋晴れ、子どもたちが仲間たちと園庭や保育室で遊びを創り出していました。

砂場のわきのテントで、4歳クラスの子どもたちが雨どいを3本組み合わせてボールころがしを楽しんでいました。雨どいの継ぎ目が合わさっていないとボールが転がってゆきません。ときどき継ぎ目をぴったり合うように調整する子ども、ゴールのバケツでは勢いのついたボールが飛び出してしまいます。あたりを探してダンボールの空き箱を探し出し、ゴールにした子ども、出発点からボールを転がす子ども、ボールに向かって「ガンバレ、ガンバレ」と応援する子ども、それぞれが役割分担し、連携協働しながら、「大そうめん流し器ボール転がし」を楽しんでいました。保育者が2人、子どもたちの遊びを見守っていると「先生も」とボールを手渡され、そーっとボールを転がしました。子どもたちは「うまい、うまい」とほめていました。先生も子どもにほめられて嬉しそう。

保育室では、「スライム遊び」の真っ最中。5才児が楽しんでいたスライムづくりを4才児も真似して遊び始めました。4才児の一人がいくつかの色を混ぜると絵の具にない色を発見しました。みな色づくりに挑戦します。ある子どもが、緑と青をまぜて両手でお団子のように丸めると、緑と青がまだらな球になりました。それを見た5才児が「あっ、地球みたい」と叫ぶと、その4才児は満足そう。子どもはすぐに

「これ地球だよ」と私に見せてくれました。私は「わあ、本当！ここはアメリカ大陸、こっちがアフリカ大陸、これはアジア大陸だね。このわきっちょに、日本があるね」と言いました。こう言ってすぐに猛反省。赤字部分は言うべきではありません。

子ども中心の保育では、大人は言葉をたくさんかけることはまずいのです。子どもの言葉を受け止め、受け入れるだけでよいのです。言葉をかけるときは、子どもに考える余地を残してあげなくてはなりません。言葉のかけ過ぎは子どもが考え工夫するチャンスを奪ってしまうからです。

ある4才児はお家からもってきた通販カタログや新聞広告を丁寧に四つ折りにして箱に大切に保管していました。その子は「カタログでおしゃべりしよう」と仲間に声をかけました。「先生もいっしょにね」と私も誘ってくれました。「どのカタログにする？」「お正月料理のカタログはどう？」で“おせち料理”の通販カタログをとりだし、ひとしきり対話がはずみました。「わあ、エビだ！おさしみの生のエビは甘くておいしいんだよ」「これ、カニ！中身を出すのがたいへん。お父さんがいつもカニの身を出してくれるんだ」「黒豆、甘くてだあいすき！おばあちゃんがいつもコトコト黒豆を炊いてくれるんだ」とお正月を迎える準備で忙しくなる家族の暮らしの一端を話してくれました。

「次は、どれにする？」「もうすぐクリスマスだからクリスマスケーキのカタログにしよう」子どもたちはケーキが大好きです。いちごのショート、チョコレートケーキに桃のケーキ、モンブラン、お抹茶ケーキとつぎつぎ見つけ出し、どれが好きか、食べたいか、話はつきない様子でした。

カタログ遊びを提案した子どもは、「自分一人で見るとより、みんなとカタログを見るの楽しいね！」といい、仲間たちが「そうだね」「楽しいね」とロク々に賛同していました。

ひよ子こども園では、園庭で、そして保育室で、異年齢が混じり合っ、連携協働しながら「遊び」は「学び」の活動を展開していました。まさに見えない力「非認知能力」(①社会性・②自制心・③挑戦力)が育まれています。

このように、ひよ子こども園では、子ども一人ひとりが主人公、保育者は賢いわき役の「子ども中心の保育」が展開しています。Y式一斉保育に疑問を感じた園長先生、実践していて苦しかった先生方が、心ひとつにして、どの子も伸びる「子ども中心の保育」に踏み出して、本当によかったですね。



図「人生の大樹の根っこをつくるのは乳幼児期」(内田, 2023)